

明野新能

新能とは、もとは 薪の神事 などと称して新年に御薪を寺社に献進する儀式で、一種の春迎への行事であった。

奈良時代、興福寺の修二会に、鎮守の杜から東西金堂へ行法のために薪をつむ儀式であり、その時翁式の聖者が薪を負って舞うことが芸能化した。近来、各地で野外能として知られるようになる。

地元の子どもたちによる
小舞

七つ子

舞 大畑 恵 岡野 有真 中嶋 紘崇
岡野 理穂 地謡 谷島 拓己 谷島希望美
長沼 千尋 谷島愛久美

狂言

しびり

シテ(太郎冠者) 中嶋 祐紀 アド(主人) 和田 健

後見 吉住 講
(子ども狂言指導)

狂言

棒縛

シテ(太郎冠者) 野村 万蔵 アド(主人) 山下浩一郎
小アド(次郎冠者) 野村 扇丞

後見 吉住 講
働キ 高部 恭史

能

巴

後シテ(巴御前) 清水 寛二
前シテ(里の女)

ワキ(木曾の僧) 森 常好 大鼓 大倉正之助
ワキツレ(従僧) 館田 善博 小鼓 幸 信吾 笛 栗林 祐輔
森 常太郎

間(里の男) 吉住 講

後見 梅若 泰志 古室 知也 梅若 紀長
加藤 眞悟 地謡 長谷川晴彦 柴田 稔
八田 達弥 西村 高夫
遠田 修 伊藤 嘉章

働キ 青木 健一

素囃子

獅子

大鼓 大倉正之助 太鼓 金春 國和
小鼓 幸 信吾 笛 栗林 祐輔

【小舞(こまい)】

狂言のなかで舞われる短い舞のこと。紋付袴姿で独立した演目として演じられることがある。狂言の基本である美しい立ち居振舞いなど身体の基礎訓練としても重要視されている。

【狂言「しびり」】

主人に買物を言いつけられた太郎冠者は、行きたくないので持病のしびりが起こって歩けないと仮病をつかいます。

冠者のたくらみだろうと悟った主人は、お芝居をして、「伯父のところから振る舞い(ごちそう)と呼ばれたが太郎冠者はしびりを起したので連れて行かれないと返事をせよ」と冠者に聞こえるように言います。すると聞きつけた冠者は、しびりは言い聞かせれば治ると言って、なにやら足に言い聞かせて立ちあがると、主人はすかさず治ったのなら買物に行けと言います。が……。

【狂言「棒縛(ぼうしばり)」】

主人はいつも自分が外出したときに、召使いの太郎冠者と次郎冠者が酒蔵の酒を盗み飲んでいることに気づき、ある一計を案じ二人を縄で縛ってから外出します。

ところが二人は縛られていても酒が飲みたくなり、苦心の末、不自由な恰好のまま大盃に酒をくみ、互いの口まで運んで飲むという珍妙な酒盛りを始めます。気分も良く謡い舞っているところへ主人が帰宅して……。

太郎冠者が棒を使ってみせるのは、日本古来の武芸の一つ棒術を垣間見せる場面でもありません。

【能「巴(とまえ)」】

木曾の僧(ワキ)が都に上る途中、琵琶湖のほとり、栗津の原で一人の女(前シテ)と出会う。

女は、木曾義仲の霊を祀る社に参り、涙を流し、僧の義仲の霊を慰めてくれるように頼むと、夕暮の草の陰へ消えていく。

参詣に来た里の男(アイ)から、僧は、義仲の最期のことや巴御前のことなどを聞かされる。

僧が弔いをしていると、鎧を着た巴御前(後シテ)の霊が長刀を肩にして現われ、義仲の最期の戦いの様を語り、さらに、一緒に死ぬ事を許されず、自害した義仲の枕もとから小袖と小太刀を形見に、涙ながらに木曾へ帰ったのだとのべ、回向を頼み、又、消え去っていく。

明野新能 開催趣意

私たち一人ひとりが自主的な文化を築いていく時、地域の自然や歴史・伝統を活かした独創的な視野に立ち、文化の創造がはかれるよう進めていくことが大切になります。

私たちは、今、生活様式や価値観が多様化するなかで、心の豊かさを求めています。

このような中で、自主的な住民参加による明野新能開催は、地域の文化を創造していく上で、大きな意義を持つものと考えます。特に将来を担う子どもたちが、日本の伝統芸能に直接触れる体験は、日本の伝統文化・芸能に対する誇りや愛着を醸成するうえで大きな役割を果たすものと考えます。

明野新能公演は、地域住民の企画・運営・舞台制作によって開催されます。

私たちは、日本の伝統芸能である能・狂言をおして、地域での文化の創造と、次代を担う子どもたちが舞台上で演じることで伝統文化を肌で感じ、感動を体験することを目的とするなかで、創る感動・参加する感動・観る感動を多くの方々で共有できることを願い開催するものです。

平成十九年四月七日

明野新能実行委員会 委員長 古田部 光文